

## 当科における胃粘膜下腫瘍に対する腹腔鏡内視鏡合同手術の経験

東邦大学医療センター大橋病院外科 長尾 さやか (ながお さやか)

齊田芳久、中村陽一、榎本俊行、片桐美和、高林一浩、大辻絢子、  
長尾二郎、草地信也

東邦大学医療センター大橋病院消化器内科 佐藤浩一郎、伊藤紗代、北川智之

胃粘膜下腫瘍に対して、腹腔鏡・内視鏡合同手術(以下 LECS)が近年報告され、当教室においても消化器内科医の協力のもと施行している。今回は胆嚢結石に対して同時に胆嚢摘出術を施行した症例を含め3例を報告する。症例1は50代女性。体上部後壁に増大傾向にある粘膜下腫瘍(15mm)を認め手術目的に紹介となった。術前検査にて胆嚢結石を認め同時切除とし、検体摘出を経ルルートで施行した。症例2は82歳男性。体中部小彎に増大傾向のある粘膜腫瘍を認めた。LECSを施行した。検体は約50mmであり臍部より体外へ摘出した。症例3は70代女性。穹窿部の粘膜下腫瘍に対しLECSを施行した。

いずれの腫瘍も胃内発育型の粘膜下腫瘍であり腹腔内からの観察では腫瘍の存在部位は確認できなかった。またいずれの症例も合併症なく経過し胃の変形も認めていない。本手技の利点は腫瘍を過不足なく安全に切除でき、切除範囲が最小限にとどめられる点であると考え。術後の胃の変形をより少なくするため、当科では切除部位を自動縫合器を使用せず手縫いにて縫合するよう心掛けている。